# 会津の鍛冶産業と関連資料コレクション

福島県立博物館 主任学芸員　内山大介

## はじめに

我々の暮らしやなりわいの道具を生み出す鍛冶屋には、鋸を専門とする鋸鍛冶、鑿や鉋、包丁などの打刃物を扱う刃物鍛冶、鍬などの農具を中心とする野(農)鍛冶がある。会津はかつて大工道具の一大産地であったが、特に鋸や打刃物の生産は東日本を代表する場所であった。本企画展では、主に大工道具を中心にその製品や製作用具等を紹介した。但し、会津における鍛冶文化の歴史に関しては資料が乏しく、分からないことも多い。また後述するが、鍛冶職人の歴史や文化については堤章氏をはじめとする研究の蓄積もあり、それ以上のことを明らかにするのは現状では難しい。そこで本稿では、図版編では紹介しきれなかった内容を含めて、近世以降の会津の鍛冶文化の流れを主に地域産業としての視点から整理し直すとともに、展示で紹介した資料コレクションの概要を紹介することで今後の研究の一助としたい。

## 近世会津の鋸鍛冶

江戸時代初期である寛文六年の記録「会陽町街改基 惣町」には、若松城下の全三二五六軒のうち、刀鍛冶や鉄砲鍛冶を除いた「雑鍛冶」が六十八軒と記録されている。[*1] 大町が二十軒、新町が十三軒、後町が二十五軒と数が多い。また同時代の寛文九年「津陽覚書」によれば、若松惣町三五一五戸のうち商工業者は二一九九戸で、「雑鍛冶」は六十六戸という。[*2] 数字として大きな相違はみられず、当時既に多くの鍛冶職人が若松城下に存在していたことが分かる。しかし「雑鍛冶」という語で分かる通り、近世における鍛冶屋は刀・鎗などの武具以外はその他として一括され、鋸や刃物それぞれの鍛冶屋について詳細が分かる資料は少ない。

鋸鍛冶についていえば、特に会津は天王寺鋸と呼ばれる伐採用手曲鋸の産地であったが、その始まりにはいくつかの異なる伝承が残されている。例えば大正十一年発行の『会津繁昌記』には、「鋸は蒲生公大阪天王寺門前に住せる中屋重内を聘し、伐木用鋸を製作せしめた天王寺鋸の名は之から始まつた」と記される。[*3] しかし一方で昭和九年刊行の『国産金物発達誌』では、「天王寺鋸は土地の名産であるに拘らず其の由来は明かでないが、伝ふる所に依れば享保年間中屋重左衛門は伊勢参宮の帰途、某所で大鋸の製法を見て感ずる所あり、帰国後会津独特の鋸の鍛錬法を応用して製造し、大工樵夫等に実験せしめたところ絶大の好評を博したのが其の濫觴であると云ふ」と述べられている。[*4] さらに昭和十六年の『若松市史』下巻では、「享保年間時の藩主松平公、家老職田中三郎兵衛玄宰に命じ、大阪天王寺門前の鋸工、中屋重内といふ者を聘し、営業者に其製作法を伝習せしめたるが初めにて、之れ即ち天王寺鋸の起源なり」としている。[*5] さらに、中屋清右衛門という人物が京都で鋸の打ち方を習い、伝えたのが始まりであるという口碑もあるという。[*6]

このようないくつかの伝承は、年代にも技術の伝達方法にも大きな相違があり、また鋸鍛冶自体の始まりと天王寺鋸の由来とが入り組み、内容も錯綜しているといえる。県教委による民俗技術の調査報告書では、天正十八年に蒲生氏郷が会津に移封した際、京都伏見から職人を連れてきたことが鋸鍛冶のはじまりで、さらに享保年間に中屋重内・重五郎を招いて天王寺鋸をつくらせ、会津の鋸鍛冶はその系統を受け継いだとまとめている。[*7] これも伝承の域を出ないが、現在一般に流布している見解に最も近いと思われる。いずれにしても多くを言い伝えに頼るしかなく、来歴を明確化するのは難しい。

これらの伝承に登場する人物のうち中屋重左衛門は、特に重要な役割を担った鋸鍛冶といわれる。姓を坂内といい、嘉永五年の番付「若松緑高名五幅対」では鍛冶の項の中央に「鋸 重左エ門」として、鋸鍛冶で唯一その名が記されている（本書24頁参照）。これも口伝であるが、江戸末期に七代目重左衛門が菜種油による焼入れ法を発明し、これが各地に広まった。以来、重左衛門は「油焼き元祖」と銘を切るようになったという。[*8] 焼入れとは、整形した鋸を再度加熱し、急速に冷やすことにより硬度を高める工程のことで、それまでの水や砂で行う方法では傷や斑が出来やすかった。その功績から七代目の中屋重左衛門は会津鋸中興の祖ともいわれている。

## 近世会津の刃物鍛冶

このように、会津の鋸鍛冶については文献記録が少ないながらも、様々な伝承が伝わっている。一方で近世会津の打刃物については、詳細はほとんど不明である。前述した寛文年間の文献に記される「雑鍛冶」には含まれているだろうが、鋸鍛冶のようにその由来やエピソード等は多くない。『会津繁昌記』には「武家時代甲冑鍛冶が副業として、大工道具庖丁類を製作した」と記されているが、詳しいことは分からない。前述した「若松緑高名五幅対」には鋸の左右に「刃」として「重房」と「重廣」の二名が挙がっており、幕末の時点でこの二人は既に打刃物の鍛冶として活動していたのであろう。この重房について山岸清次氏によれば、その墓誌に「寛文年間（一六六〇年頃）、仙台領若林より重房が移住し、保科公の御用鍛冶となる」と記されているという。[*9] 重房は代々刃物鍛冶であったが、十六代目が大阪の刀匠・尾崎正隆のもとで修行をして刀工となり、その時代の門人に日下部重道がいる。いずれも明治維新後には打刃物鍛冶に戻ったが、この重房と重道が会津における刃物鍛冶の源流とされる。

## 職人の近代化と鍛冶産業

近代という時代は、鍛冶屋にとっても様々な変化を求められる時代であった。明治・大正期における鋸及び刃物鍛冶の変遷を、『若松市史』・『会津若松史』及び堤章氏の研究からまとめると以下のようになる。[*10]

明治九年の廃刀令を契機に、それまで刀匠として生きた職人は鉋・鉈・包丁などの刃物鍛冶へと転業した。それでも刀剣で培った技量は高く評価され、明治十年の内国勧業博覧会では日下部重道の包丁が優秀作品に選ばれている。会津の鍛冶屋に弟子入りする者は会津・県内から新潟・東北各県へも及んだという。一方鋸鍛冶は、戊辰戦争後にその生産は衰えた。やがて明治十四、五年になると北海道の森林開拓のために、伐採用鋸や打刃物も需要が拡大した。しかしいずれも小規模工場による経営で景気変動の影響を受けやすく、日清戦争による好況も束の間、すぐに不況の煽りを受けた。

低迷する会津の鍛冶業界を立て直すべく立ち上がったのが、金物商の大平善蔵である。大平は、大量生産でも一定の品質を保持できる洋鋼を会津の金物生産へ導入することを目指した。飯盛山の麓に建てられた「大平善蔵先生頌徳碑」（昭和六年）には、以下のような事績が刻まれている。まず明治三十年に先進地である播州（現在の兵庫県）を視察し、その後初代重正や二代重道を派遣して当地の技術を学ばせた。また自らも山仕事の職人と接しながら鋸の研究を進めたという。昭和三十五年には私財を投じて各種品評会を開催し、さらに明治四十年には当時最先端のスプリングハンマーを備えた「大平鋸工場」を現在の会津若松市追手町（県合同庁舎付近）に設立した。約三千坪の敷地に広がる大工場で、鋸の量産化により北海道・樺太方面への出荷を狙い、年間二万枚の鋸を生産した。しかし、当時の鋸鍛冶職人の多くが株主や重役として参加して話題を呼んだ大工場も、十年余りで閉鎖を余儀なくされた。堤章氏は、洋鋼による品質の低下や職人が工場労働者になることによる意欲の低下、過大投資による資金難などをその原因として推測している。(*11)

職人の仕事は一国一城の主として個々に独立した性格が強いが、近代には様々な横のつながりも生まれてきた。大正八年には同業組合を組織し、製法の改良や他産地の視察、焼き入れ等の講習、製品の競技などを進め、「会津鋸の声価と信用を挽回した」という。(*12) 大正七年の若松市における生産物の記録では、鋸は生産額二十四万七〇〇〇円、刃物類は十八万一五九〇円で、順位としては清酒・漆器・綿織物に続いてそれぞれ四位と六位に入っている。(*13) この時期は、近世以来の伝統的な産業が引き続き代表的な地位を占めていることが分かる。

## 昭和期における鍛冶産業の盛衰

昭和に入ると経済不況の煽りを受けた会津の鍛冶産業だが、それでも地域の産業として一定の地位は保ち続けた。昭和十二年の若松市庁舎落成記念につくられた「会津五銘鑑」の「土産物」には、「漆器」に続いて「打刃物、鋸」と記され、また「鋸」の項には中央に「博労町 中屋重兵衛」が、その左右に中屋真兵衛、中屋忠左衛門、中屋善兵衛、中屋友右衛門が挙げられている。特に鋸は金融恐慌下で北海道・樺太方面の製材業が不振となり大打撃を受けたが、その後復活したという。昭和十六年当時、鋸は北海道に七割、東北と県内に三割、打刃物は近県に七割、北海道と県内に三割が出荷されていた。(*14)

この頃の鍛冶屋の軒数をみてみると、昭和十四年発行の「若松市物産陳列館概覧」では、前年度における「若松市主要産物」のなかに「鋸打刃物其他」が位置づけられ、製造戸数三十九軒、職工は一七七人、生産額は十八万二〇〇〇円と記録されている。一方『若松市史』下巻には、大正から昭和期にかけて同業組合の調査による若松市内の営業者数の変遷が記録されている。これによると、大正八年には鋸工二十二戸、打刃物工十二戸であるが、大正十五年では鋸工三十九戸、打刃物工十七戸、昭和十五年は鋸工三十六戸、打刃物工十一戸で、この年の年生産額は五十万円という。調査方法が不明確なため単純な数字の比較はできないが、大正期に工場数としては増加しており、昭和恐慌の前後では打刃物はやや減少しているものの、鋸鍛冶の軒数には大幅な変化はみられない。

また戦時中には、会津の金物業界も時局の影響を受けた。統制上の理由から、昭和十四年六月には鋸工業組合や打刃物工業組合などが成立している。(*15) また堤章氏によれば、刃物鍛冶は福島県利器工業組合のもとに糾合され、昭和十七年から二十三年まではこれが軍刀組合に名を変えて

活動していたという。[*16] 例えば重房の系譜を継ぐ重次や重道も、受命刀匠として多くの軍刀をつくっていた。

戦後、昭和二十三年の福島県統計書における若松市の業種別工場数では、漆器や製材木工業等に続き、金属製品製造業は第四位で六十八の工場があった。[*17] 中でも鋸は戦前戦後を通じて全国的にもその品質が認められ、特に戦時中は満州や北海道、青森が主要な市場であった。堤章氏も、戦後復興から高度成長期へと歩みを進めた時代は、明治の北海道開拓期と並んで天王寺鋸の需要が増えた時期であったと指摘する。昭和三十三年頃の会津若松市内には三十九軒の鋸鍛冶があり、職人や弟子は二百数十人にのぼった。鋸組合では運動会や野球大会を盛大に行っていたという。[*18]

こういった記録や証言からは、戦前から戦後の時期は会津の鋸や打刃物生産は比較的盛んであったことがうかがえる。しかしその後の高度成長期になると、工場数は維持しつつも生産額は落ち込んでいった。『会津若松史』ではその原因に、技術の継承者不足や企業としての新しい生産体制に移行することができなかったことなどを挙げている。[*19] 同業組合も様々な努力を重ねたが、昭和三十年代に入ると休眠状態になる組織が続出したという。特にチェーンソーの普及や建築工法の変化は、鋸をはじめ伝統的な鍛冶道具の需要を急落させた。刃物鍛冶職人も重房以来の門人たちは次々と姿を消し、昭和五十年半ばまで活動を続けていた重道、重延、重高らも相次いで家業を閉じた。[*20] 近代以降、幾度もの困難を乗り越えてきた会津の鍛冶屋たちであったが、かつてのような隆盛の時代は今日まで戻っていない。現在、会津で中屋や「重」の名を継ぐ職人は、それぞれ一、二軒が残るのみとなっている。

## 会津の鍛冶文化関連資料コレクション

記録や伝承をつなぎながら、会津における鍛冶産業の変遷を整理した。前述したように、会津の代表的な産業であった鍛冶の歴史も、記録が少ないために不明確なことが多い。しかしその一方で、本企画展でも紹介したように、職人が生み出した製品や残された道具類等の実物資料はコレクションという形で現代までその一部が継承されている。これらは会津の鍛冶文化を後世に伝えるうえで、重要な鍵を握っているだろう。そこで、本書図版編で紹介しきれなかった個人コレクションと、福島県立博物館が所蔵する鋸鍛冶関連資料コレクションの概要を記しておきたい。

**山岸清次コレクション**　山岸家は会津を代表する宮大工棟梁の系譜で、代々「喜右衛門」を名乗った。特にさざえ堂の建築に棟梁として携わった山岸喜右衛門道重は著名であるが、その後も歴代当主が数々の名建築に携わっている。大正二年に生まれた山岸家十五代・清次氏も、滝沢本陣住宅門の復元や龍興寺八角堂の新築などを手がけたが、同時に同家に伝わる資料のほか鋸や打刃物などの鍛冶道具の収集を通して独自の研究を進め、『会津鋸と打刃物について』等の書物を著した。大工道具の研究者であった村松貞次郎氏とも交流が深く、村松氏の著書にも清次氏の研究成果が活用されている。また鍛冶製品に関するコレクションは、重房・重道をはじめとした鑿や鉋等の打刃物と、中屋の鋸など多数にのぼる。清次氏自身で整理された一覧では鑿・鉋だけで百点以上になるが、鋸をはじめ未整理の道具類も数多く、全体で数百点にのぼると考えられる。山岸家の宮大工としての系譜は十六代で途絶えたが、そのコレクションはご子孫に受け継がれている。

**堤章コレクション**　堤章氏は大正十三年に塩川町（現・喜多方市）で生

まれ、出征後に会津へ戻り鍛冶職についた。父親のもとで鍛冶技術を修め、昭和三十年に堤製作所を創立してステンレスの「姫鍬」を製造し全国へと販売した。また同時に会津の鍛冶・金工品を収集したが、そのコレクションは鋸や打刃物から、農具や鉄鍋、自在鉤などの生活用具まで幅広い。その一方で調査研究を精力的に進め、会津の鍛冶文化の全貌を明らかにした「鍛冶叢書」全六巻を著した。丹念な文献調査とフィールドワークによる、会津の鍛冶文化研究の金字塔といえる。さらに平成六年、自身のコレクションと作品合わせて四五〇点を展示した資料館「鉄の工芸館『会津鍛冶屋敷』」を会津若松市上町に開館した。[*21] 堤氏は平成二十一年に亡くなられたが、そのコレクションは現在も同家に伝えられている。

**山口栄吾コレクション**　山口栄吾氏は会津若松市大町で金物屋「山口商店」を営んでいたが、その傍ら農鍛冶に関する道具や製品を収集し、その調査を進めた。著書『会津農鍛冶小史』では会津における農具や農鍛冶の変遷をまとめ、個々の職人を紹介している。栄吾氏亡き後、平成十七年に約五七〇点のコレクションが当館に寄贈された。生活用具をはじめ、農具・漁具や山仕事の道具、和釘や金具類、屋根葺きや桶屋・下駄屋の道具など、鍛冶屋が手がけたあらゆる資料が揃っている。さらにふいごや金槌などの製作用具、玉鋼などの原料まで含まれる点が、コレクションの大きな特徴といえる。

これら三名によるコレクションは、いずれも多様な形で鍛冶文化に直接関わる当事者により形成された。それぞれの仕事で培った知識やネットワークを活かした資料収集と調査研究であったといえる。その成果としての著作物は、一九八〇年代から九〇年代という、会津における鍛冶文化の最後の灯が消えようとしていた時代に生まれたものだ。ここにご紹介した方々はいずれも鬼籍に入られているが、その研究成果と残されたコレクションは、会津の鍛冶文化史を語るうえで欠かせない資料となっている。

**中屋市右衛門関連資料**　中屋市右衛門（川村家）の初代は新潟県小須戸村（現・新潟市）に生まれ、明治三十三年に会津若松の鋸鍛冶・七代中屋源助に弟子入りした。大正元年に新横町で独立し、その後は三代に渡って天王寺鋸や大工鋸、下駄屋鋸などを作った。平成十七年に三代・市右衛門が終業され、関連資料が当館に寄贈された。一五〇点ほどの資料には、金槌や銑、たがねなどの道具類のほか、鋸の型やコミなどの未製品、目抜き用のプレス機なども含まれている。

**中屋忠左衛門関連資料**　中屋忠左衛門（小島家）初代は文化四年に生まれ、当初は農具なども製造した。その後中屋重左衛門に師事し、嘉永四年からは鋸鍛冶として独立した。四代忠左衛門は大平鋸工場の株主となり、また会津製鋸組合理事長や県利器工業組合の顧問に推されるなど、近代会津の鋸産業における主導的な役割を担った。旧博労町で多くの弟子を育成しながら七代に渡り鋸鍛冶を営んだが、その後廃業され、平成二十九年に関連資料が当館に寄贈された。金槌、銑、やすり、狂い取り台などの製作用具や奉納剣などの儀礼用具、さらに窓鋸などの製品を含めその数は四百点以上にのぼる。

## おわりに

近代以降、幾度もの浮き沈みを経験した会津の鍛冶屋たちは、その度ごとに様々な形で自らの文化をつないできた。地域産業の代表としての地位は、経済恐慌や戦争といった激動の時代を経ても変わらなかったといえるが、高度成長期以降の社会変化の波には乗ることができなかった。

現在、会津の文化として鍛冶製品や技術が取り上げられることは、残念ながらほとんどない。それは現代の産業としては消えかけているからであるが、一方で会津の歴史として鍛冶文化を掘り起こす意義は大いにあろう。会津が「匠のふるさと」として歩んだ営みに、本企画展を通じて少しでも目を向けてもらえればと思う。

**註**

＊1 庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳』巻一（寛文風土記）一九七九年、吉川弘文館。

＊2 会津史料大系刊行会編『会津鑑二』一九八一年、吉川弘文館。

＊3 佐藤久米三郎・田尻浅之助『会津繁昌記』一九二二年、高阪信文堂。

＊4 小西勝次郎『国産金物発達誌』一九三四年、文書堂。

＊5 若松市役所『若松市史』下巻、一九八七年、国書刊行会（一九四一年刊行の復刻版）。

＊6 村松貞次郎『鍛冶の旅 わが懐しの鍛冶まんだら』一九八五年、芸艸堂。但し、中屋清右衛門が会津鋸の創始者であるという口碑について村松氏は、「これは大工鋸に限っての話かもしれない」と述べている。また平澤一雄氏によれば、中屋清右衛門は中屋重左衛門の親であるという（平澤一雄『産業文化史 鋸』一九八〇年、クオリ）。

＊7 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団『福島県の民俗技術』二〇〇八年。

＊8 堤章『会津の鋸鍛冶―近代の群像とその系譜』（鍛冶叢書3）一九八九年

＊9 山岸清次『会津鋸と打刃物について』一九八〇年、私家版

＊10 若松市役所前掲書、一九八七年。会津若松史出版委員会『会津若松史』第六巻（明治の会津）、一九六六年。堤章『会津の刃物鍛冶―藤井重正の周辺』（鍛冶叢書2）一九八六年、堤章『会津の鋸鍛冶―近代の群像とその系譜』（鍛冶叢書3）一九八九年、堤章『軍刀組合始末―陸軍受命刀匠の周辺』（鍛冶叢書5）一九九四年。

＊11 堤前掲書、一九八九年。

＊12 若松市役所前掲書、一九八七年。

＊13 会津若松史出版委員会『会津若松史』第七巻（大正・昭和の会津）、一九六七年。

＊14 若松市役所前掲書、一九八七年。

＊15 若松市役所前掲書、一九八七年。

＊16 堤前掲書、一九九四年。

＊17 会津若松史出版委員会前掲書、一九六七年。

＊18 堤前掲書、一九八九年。このあたりの鍛冶屋の軒数はいずれも会津若松のものだが、昭和五十年代の調査でも「以前は喜多方でも四〇軒以上の鋸鍛冶がいた」と記され、会津全体ではさらに多くの鍛冶屋が戦後も活躍していたと考えられる（会津若松市教育委員会『民俗調査報告書（町方編）』一九八二年）。

＊19 会津若松史出版委員会前掲書、一九六七年。

＊20 村松貞次郎前掲書、一九八五年。

＊21 『朝日新聞』一九九四年二月十一日付（福島版）。